広島の在日一世の聞き取りから

都市社会学研究所　安（アン）　錦珠（クンジュ）

戦争が終わって五七年が過ぎた。戦前・戦後直ぐに来日した韓国・朝鮮人は年老いて、すでに亡くなった人、記憶さえ薄れた人が増えている。今、在日一世の聞き取りがあちこちで進められていると聞くが、十分に聞き取ることのできないまま、在日一世の方はどんどん少なくなっている。民団（大韓民国居留民団）では、青年会を中心に大規模な在日一世の聞き取りが始まったという。何に焦点を当てての聞き取りであるかは承知しないが、いずれにせよ、聞き取りの記録としての価値は大きいものになろう。

わたしは、二年前からある老人介護施設で仕事をしている。それは、介護保険が始まって増えたデイ・サービス・センターの一つである。わたしの職場である施設は、広島市内の被差別部落の中にある。そこには在日韓国・朝鮮人が集住していて、その人口は地区全体の一二パーセントにも及ぶという(1)。どうして在日の人びとが集住するようになったのだろうか。一人ひとり、どのような経緯でそこに辿り着いたのだろうか。人びとは、たがいにどのような人間関係をなして生きてきたのだろうか、またその地区とどのような関係を築いて生きてきたのだろうか。・・わたしは、地区の在日の人びとに次第に関心を抱くようになった。広島では、戦前のことを考えるときでさえ、原爆の問題を抜きに語ることはできない。戦前に、韓国・朝鮮人たちは、祖国を植民地として併合した当の帝国主義の本国へやって来て、どのような暮らしをしていたのだろうか。日本の戦争のおかげで広島に原爆が投下され、多くの韓国・朝鮮人が殺された。辛うじて生き残った人びとは、帰国もできないまま、戦後も広島に住み続けてきた。わたしは、これらのことすべてを在日一世の貴重な生活体験として、今のうちに資料と

して整理しておくべきだと思うようになった。わたしは、生活体験の記録づくりを始めることにした。

わたしがデイ・サービス・センターを場に、そこに通う在日一世の人びとに聞き取りを始めたのは、二〇〇一年七月であった。それから一年、わたしは介護員という立場で、センターを利用する在日一世や日本人のお年寄りの会話や、お年寄りとセンター職員の会話を、折に触れて、しかし丹念に、注意深く記録することに努めてきた。今回の資料紹介は、それらの記録の一部を編集したものである。まだ聞き取りの途中の段階にあり、さらに聞き取りを重ね、記録を蓄積しなければならない。その上で、いずれは会話の内容分析にまで踏み込みたいと思っている。ということで今回は、聞き取り記録の一部の紹介ということに留めざるをえない。

聞き取りの場であるデイ・サービス・センター（以後、話しの流れで「センター」と略する場合もある）は、利用者の定員が一日二〇人という施設で、月曜から土曜までの週六日間、介護業務を行なっている。利用者は、介護度(2)によって、またその他の必要に応じて、週に一度から四度、介護を受けることができる。利用者は総数六〇人で、そのうち在日韓国・朝鮮人が一一人である。およそ五分の一が在日のお年寄りという、在日の利用者が多い施設である。なかでも月曜は五人、水曜は七人、金曜は七人と、これらの日に在日の利用者が多い（二〇〇二年七月現在）。このためセンターは、地域でも「あそこは在日の人たちが行くところ」と噂されて、日本人のお年寄りが利用を控えがちということにもなる(3)。またこの地域が被差別地区で、かつては食肉屠場があった。しかし一一年前、屠場は広島湾の埋立地に引っ越していった。かつては屠場や関連工場がたくさんあって、今以上に食肉文化が繁栄していた(4)。牛肉や豚肉だけでなく内蔵も食べる習慣をもつ在日の人びとにとって、地域はもっと馴染み深い所であったことだろう(5)。

わたしの職場のデイ・サービス・センターで介護を受ける在日の利用者は、次のような人びとである（二〇〇二年七月現在）。

在日一世の出身地は、一一人のうち一〇人が慶尚南道の出身であるが、その地方のあちこちから来ている。センターが位置する同区内に、慶尚南道ハプチョンの出身者が集住する町があるが、出身地はその町とは異なる傾向にある(6)。来日時の年齢は三歳から一八歳であり、来

日の動機は親に連れてこられた人、見合い結婚で来た人、親類を頼って来た人などさまざまである。

聞き取りデータには、観察したことも含まれるが、おもには語り手が語ったことから成る。語り手の話に補足が必要な部分は（　）で補った。語りの前後に説明がなくては意味不明の場合も（　）で補った。語り手が在日一世なので、日本語と韓国語を交えた聞き取りとなった。韓国語による長い話は日本語に翻訳した。短い話はカナで表記し（　）で訳語を補った。語り　手の名前はアルファベッドの大文字で表記した。聞き取り相手は、在日一世に絞った。会話に介在する日本人は、デイ・サービス・センターの職員がおもである。最後に人名だけでなく、その他の固有名詞も原則として匿名にした。以下、聞き取り（の一部）である。

Kさん（九〇才、男性）

〈二〇〇一・七　筆者のセンターへの出勤二日目〉

筆者：アンニョンハセヨ。ハラボジ（こんにちは、おじいさん）。

K　：こりゃめずらしい話しじゃね。

筆者：アンクンジュイブニダ。ハラボジヌンキムキュボクイシジョ（安くんじゅです。おじいさんはキムキュボクでしょ）

（Kさんが「わたしはキム・ケイフクです」と言ってテーブルの上に漢字をなぞる。）

〈二〇〇二・五〉

職員：以前にセンターにきていた在日の男性がいたんだけど、去年お亡くなりになった、金さんという人がね。彼は若い頃宇品で荷降の仕事をしていたけど、その（仕事がない）間には、仲間と花札をずっとしていたらしい。その習慣か、センターに来るのは花札をしにくるようなもんだった。

NSさん（七六才、女性）

（母国語と日本語の言葉の使い分けをする。）（筆者と話すときはほとんど韓国語で話す。たまに韓国語の言葉がすぐ出ないときは「ここで長く住んでいると言葉も忘れちゃうね。（韓国語）」と言いながら日本語を使うことがある。在日同士で話すときは、Bさんには韓国語で、Lさんには日本語と韓国語でというように使い分けている。）

SMさん（七四才、女性）

わたしはなぜ日本に来たのかな。家は親戚がだれもいない。はじめに兄が来た。日本に着いて、それで父が、兄が可哀想だということで、家の物を全部片付けて家族連れて来たの。

昨日転けて膝を打ったの。ここ膝にあざができた。胸を切ったんじゃろ。それからは苦しい。なにかが喉をのぞくような感じがする。五三歳のときに脳梗塞で倒れた。それからなの。それまでずっと徹夜で仕事をしていたんで、身体がだめになったんじゃろ。それからは仕事もできなくなった。

職員：SMさんは夫が日本人の愛人との間にできた男の子を育ててきた。

施設の経理の仕事をしている孫：

二五～六年前に韓国のマサン辺りの慶尚南道からお嫁さんを迎えた。息子夫婦に二人の男の子ができた。長男が二五歳で施設全体の経理をしながら、センターの送迎や学童との関わりをもっている。

（七夕の願いでは「息子が酒を飲まないように」と書いたようにお酒で悩まされることがセンター職員や利用者の間で知れ渡っている様子である。）

SM：わたしは兄がドウレ（二人で）、姉さんがハナ（一人）。四人兄弟のマンネ（末子）。父がとても優しかった。私が産まれるとき、嬉しくて、父はわかめやらを買いに行ってた。だけど母は私が女の子だといって捨てようとしてたみたい。

それを聞いた父が「おまえそんなことをすると罰が当たるぞ」と言ってわたしを大事にしていたみたい。出かけるときはいつもきれいに髪もきれいに編んでくれたり、飴も買ってくれた。船でタイを集めてイルボンサラム（日本人）相手に商売をしていた。わたしが小さいときに日本の飴とかをよく買ってきていた。すごく可愛がってもらっていた。母は愛想がない人だったけど。

父と母は府中に住んでいたけど戦争が終わってすぐ（韓国へ）帰った。シオメ（お姑）も帰った。

わたしがどうしてここに残ったかというと、旦那が（原爆の）ガスを吸って身体中に水脹れみたいなもんができた。そのときは薬がないじゃろ。なにを使ってもため。鳥の血が効くといって、手で鳥を逆さにもって塗ってもため。効かなかった。筆の墨がいいといって、それを塗ったらちょっとよかった。でもしっかりは治らなかった。それで体が弱くなった。（韓国へ）帰ったらもう死んでいたじゃろ。

兄もみんな帰った。若いときは、店が忙しくて（よう）行けなかったけど、今は身体がこうで帰れない。

〈日本人利用者の誕生日で〉

ＳＭ：あなた、若いときに、うちのお父さんのあとを追いかけたでしょう。お父さんがお風呂から出てくるのを待ってたりして。こんなことも言って笑えばいい。

他の利用者：ここのお父さんは、小さいけど男前だったから

ＳＭ：わたしは肉をあんまり食べない。若いときには背が高くてひょろひょろして細かった。お父さんは小さい人で、シオメが小さかった。息子が小さいから、嫁は大きい人を貰いたかったみたいよ。親同士の話し合いで、顔も見もせずに結婚した。

Ｂさん（八四才、女性）

〈比治山でのドライブ〉

（車三台での出発。二台のセンターのボンゴとわたしの車。わたしの車にはＢさんと日本人利用者、職員が乗る。比治山の上に上がると）

Ｂ：ピカで子供を抱いてここまで避難してきた。三番目の子供を抱いていた。

〈二〇〇一・八・三〇〉

Ｂ：（日本人二人が会話をしているのを横でじっと見つめているＢさんに気付いて筆者が「あの方を知っていますか？」と聞くと「うちの前におる。可哀想な人じゃ。男の子ばかり五～六人産んどるんじゃがだれも看てくれない。可哀想。わたしも可哀想。」）

（日本人利用者に「Ｂさんを知っていますか」と聞くと、「知らん」と一言で答えて、もう一人と会話を続けていく。それを見てＢさんがわたしに向けて、おいでおいでと手ふりをする。わたしがＢさんに寄っていくと「話かけん方がいい。うちの前におる。だれも看てくれない可哀想な人じゃ。わたしも可哀想な人。死んだ方がいい。つまらん」。）

（後から分かったのだが、Ｂさんの斜め前のすぐ近くにＹさんの家があった。近くに住んでいながらいつもに無視する態度が出てくる。）

Ｂ：孫娘が三人おる。二人は二十歳過ぎて、一人は一六才。口が悪い。死んだ方がいい。つまらん。

職員：いつも「死んだほうがいい」「つまらん」と連発している。

他の在日利用者：この人は一所懸命働いていたんだから。娘が悪い。この人が稼いで家を建てたのだが、火事にあった。可哀想。お金は息子と孫が全部使ってしもうた。

職員：孫が三人いるんだけど、どうも母親が違うらしい。少なくとも三番目はね。母親が子供を産んで出て行ったから、孫娘の面倒を看てきたらしい。だけど、孫娘が少し障害があるのを、「おまえは生まれん方がよかった」と愚痴をこぼしていたらしい。それが今になって、孫娘がお婆ちゃんに「死ね」というの。

（Bさんはショート・ステイを繰り返していて、入所を希望している状況にある。）（のちには入所した。）

〈二〇〇一・一一・一一　バザーの日〉

（一一月六日、白菜の塩漬けをした。白菜四二株。日本人利用者と厨房の職員、ボランティアでする。七日、キムチの本漬けをした。在日利用者のYDさんが中心になり、KKさんが手伝う。日本人利用者の中で比較的に元気な人が手伝う。九日、キムチをバザーに出すための袋詰め）

（筆者は仕事が終わって、子供を迎えに行くまでの三〇分間、バザーのなりゆきの話を聞きたくて、報告書を書く口実でセンターへ立ち寄る。YDさんがわたしと同じ時間にセンターをふたたび訪ねてきていた。センターの部屋ではその日の職員が利用者の報告書を書いていた。報告書は、利用者が帰った後に個人記録を付ける。いつもより遅い作業だった。わたしは報告書を書きながら、YDさんと話をする。）

筆者：今日は（キムチを漬けるのに）ご苦労さまでした。何株漬けたんです？

YD：六個入っている箱が七つあるから、何個になるのかな・・。

筆者：四二株になるんですね。すごいね。「キムジャン」(7)のようだね。

（筆者が「株」の単位で聞いたが、YDさんは「個」で答える。掛算は不得手な様子である。）

YD：そうよ。明日はチヂミの用意をして、チヂミはあなたが焼きなさいよ。

筆者：はい。

センター長：だめよ。あなたはさんま担当。

YD：なにしてる。こんな人にチヂミを焼かせないと。

センター長：チヂミは決まっている。去年チヂミを焼い

た人がいる。大分鍛えられたから。でも、ＹＤさんが水曜日に入ってよかったね。ＹＤさんいなかったらどうしたんかしらね。

ＹＤ：去年まではたれがキムチを作ったの？

センター長：Ｂさんが。

職員：Ｂさんはそのときは元気だったのよ。今はこうなっているけど。Ｂさんはあんまりいろいろと入れなかったね。シンプルなキムチだった。それでも美味しかったよ。

筆者：ＹＤさんは何を入れたんですか。

ＹＤ：なしとりんご、にらに海老の塩辛・・・。

職員：ああ、海老の塩辛も入れるんですか。

ＹＤ：そうよ。入れないと美味しくない。

筆者：わたしも塩辛を入れないと美味しくない。夏には臭いといって、人によっては入れない人もいるけど。

（ＹＤさんは店が終わる六時までには帰れないと言い、センターで時間を過ごす。）

（昼食が終わり、利用者の休憩時間に厨房に取りにいくものがあって立ち寄る。日本人利用者のｔｙ―厨房職員の母―さんとボランティアの一人がチヂミの具を切っていて、ａｄさんがぜんざいを作っている。二回目の厨房の立ち入ろうとしたとき、ＹＤさんが手に袋を持って上がろうとしている。）

筆者：今、上（二階）では、チヂミの準備をしていますよ。

ＹＤ：そうよ。それで来たのよ。青糖辛子を持ってきた。ミキサで刻んで。これを入れないと美味しくない。

筆者：ええ！青糖辛子があるんですか。

ＹＤ：あるよ。うちの店にも今日ある。

筆者：そうですか。知らなかった。今度買いにいきます。

〈一一日〉

（バザーの販売。朝の九時に到着。すでにバザーのためのセッティングがしてある。）

ＫＫさん（八〇代、女性）

センター長：ここから見たら、ここは韓国みたいだね。

ＫＫ：そうよ。ここは韓国じゃ。何か食べなさい。ぜんざいでも食べなさい。

筆者：うん、後から食べる。

ＫＫ：（二五〇円出しながら）これで食べなさい。

筆者：いいよ。わたしが買うから。

ＫＫ：わたしがおごるから、これでしなさい。

筆者：ありがとうございます。

ＫＫ：今日は私がおごってあげる。

（KKさんは、わたしの前にヘルパー職員一人、後にヘルパー職員二人、KKさんの友人の日本人にもおごっていた。人におごるのが大好きという韓国人の気質が出ている。）

〈二〇〇一・一一・一二〉

（場面　七〇年来付き合っている幼なじみの二人とボランティアとの会話）

日本人利用者：F病院に入院していたときいっしょに入院していた韓国人なんだけど、その人は日本を敵（カタキ）に思っているから、言ってやった。「それでもあんたは日本で飯食うておるじゃんか」と。言わんやよかった。

ボランティア：それでもね。昔、日本がそれだけ悪いことしたんだから・・。今アメリカでもそう。何千人の人が爆発で死んだけど、アメリカがそれだけ悪いことしたんだから。それをアラブ人が悪いといっとるけどね。

日本人利用者：そうよね。

（わたしはその隣りで仕事をしていた。話は自然に聞こえて、あえて会話には参加しなかった。わたしの右隣には在日韓国人利用者が二人並んで座っていた。無論話は彼女等にも聞こえているが、話を聞くだけで一言も発言をしなかった。あえて会話に参加しなかったのは話のなりゆきを見ていたかったからだ。）

〈二〇〇二年三月四～一六日〉

（朝鮮総連が立ち上げるデイ・サービス・センターから実習生六名が実習に来た。L、NS（在日）、IM（日本人妻）がそちらへ通うことを希望する。KK、YD等の金曜日メンバーは、総連関連のところだからといって、拒否する。）

KK：先生、心配しなくていいよ。わたしたちはそんなところは行かないよ。ここにずっとくるから。

hz（日本人利用者）：ここを裏切ることはしない。ここほどありがたい所はない。

HAさん（六六才、女性）

わたしは三才のとき（一九三九年）に日本に来た。姉が一人いる。今は兄弟は六人なの。父がみんな連れてきた。三才のときに来たから、韓国のことは全然覚えていない。朝鮮語も話せない。聞くのはちょっと分かる。小学校は日本人の学校に行ったけど、ものすごくいじめられた、朝鮮人だからといって。だから日本人はきらい。日本人には言

えないけど。私は北朝鮮の人よ。パルゲンイ（共産党を意味する）。

（HAさんは、いつもセンターの職員よりも早く来て、朝の支度を手伝ってくれている。来る時間がいつなのかはまだだれも見たことがない。職員の推測では、朝食がすんですぐ来るのではないかという。この日は、わたしが他の職員より早く着いたので二人だけの話ができた。そこに職員が現われると、話はぴたっと止んだ。）

Cさん（七八才、女性）：

韓国人は韓国へ行って暮らした方がいい。ここじゃ淋しい。わたしは親戚もきょうだいもいない。主人も早く死んでずっと一人よ。一九才のとき（一九四二年）に兄とゴモ（伯母）とおじと四人ではじめて横川駅に着いて、シオメ（姑）が迎えに来てくれた。はじめはシオメがわたしを韓国から連れてきたかったんだけど、許可がおりなくて、主人じゃないとためだったんよ。それで、兄が連れてきたのよ。シオメは日本人なの。シアボジ（舅）は、韓国に子供がおるのに、日本に来て日本の人といっしょになったの。それで主人が父親のところに探しにきたのよ。それで、シオメが韓国から嫁を貰おうとして、写真を見てわたしを連れてこようとしたの。主人が二四歳で、私が一九歳のときなんだけど。わたしは写真を見たときはこの人ならいいかなと思ったんだけど、来てみると、あんまりよくなかった。結婚してよかったのは、一～二年だけ。原爆のピカがあって、食べ物にも苦労して、本当にあのときは苦しかった。主人もピカがあって二～三年後に死んだし。主人は血だけ残して死んだのよ。それからはずっと一人。主人は鉄道の仕事をしていた。シアベ（舅）は三菱で仕事をしていた。あのとき横川に着いてから、ずっとこの辺でおる。まだ元気なときに韓国へ三回行ってきたけど、もうこの身体じゃ行くこともできない。兄も帰ったし、ここでは淋しい。いいことなにもなかった。ここ（センター）にはじめに来たときはよかった。歌って、踊って。だけど今は身体がこうだからなにもできない。

（Cさんは、センターで「踊り姫」と言われている。韓国の民謡が流れて、ハンカチ一枚持たせると、自然に体が踊りだす。体の調子がよくないと言いながらも、背中をちょっと押してあげると、立ち

上がって踊りだす。）

KEさん（七五才、女性）

私は宮島の方の阿品台に住んでいた。そのときによくぜんまいを取りに行ってた。二時間も車に乗って行ったりもしてた。法事でぜんまいを使ったり、家で食べるために取りに行ってたよ。（ぜんまいを茹でるときには灰か、炭酸を入れて茹でるという日本人利用者の話を聞きながら、KEさんはわたしに）炭酸を入れなくてもやおくなるからなにも入れずに茹でた方がいい。やおすぎると美味しくない。（わたしは）阿品台に住んでいたけど、一九歳で結婚して広島に来たの。それからはずっと広島におる。

（三月二二日午前中の行事として四月のカレンダー作りをした。B四の用紙上半分が塗り絵になっていて、下半分が日付になっている。塗り絵の部分には、さくら柄の行楽弁当、チューリップ、竹藪、ぜんまいの四種類を準備したが、在日の人の六名のうち三名がぜんまいを選んでいた。日本人の間では、行楽弁当が大半をしめていた。）

KK：一八歳に（結婚）式だけあげて、一九才のときに嫁に行ったよ。主人がジンビョン（徴兵）を逃れるために、島根県に行った。そこは三月までも雪が降って、ようけ積もった。

YD：わたしは京都におった。一八歳で結婚して、一九歳に広島に来た。広島には親戚がおったんだけど、お姑さんが先に広島に来てみてから、広島で住んだ方がいいんじゃないかというから、お姑さんと家族全部で来た。

（YDさんは八百屋の「YD屋」を経営してきた。今は息子夫婦に任せているが、漬物はまだ自分で漬けて販売している。漬物は、キムチと日本の漬物も漬けている。センターに来た日も、昼からは漬物を漬けるために早目に帰ったりしている。）

筆者：ここら辺の韓国の人はみんな知っているんですか。

NS：わたしは終戦後に帰ったの。だけど、お父さんが帰らないから仕方なく戻ってきたの。子供を二人連れて。

C：そのときは、みんな、今は川になっているけど、そこに集まって住んでいたからよく知っている。

NS：今は家を貰ってあちこちおるけど、みんな知っている。

C：他のところに行った人もいるけど、北朝鮮へ行っ

た人もたくさんいる。あっちへ行くといい待遇されるといわれてたくさんの人が行ったけど、帰ってこれなくなった。もう死んだじゃろ。ここでは白いご飯に食べ物には不自由しなかったのに。

〈二〇〇一・五・二二〉

YD：この人はお嬢様育ちだから、あれ嫌いこれ嫌いがたいへん。わたしはなんでも食べる。だけど、お父さんが早くなくなって苦労していた。

〈二〇〇一・六・一九〉

C：韓国の歌を教えて。なんにも歌えない。歌いたいんだけど。この前温泉行ったときに踊ったテープを家で聞きたい。家でもやもやしてるときにつけて踊りたいね。それいい歌がたくさんはいっているね。お金はなんぼかかる？お金出すから。

〈二〇〇一・七・一〇〉

C：歌を歌いたいんだけど、よううたえんのよ。テープ聞きながらはちょっと歌えるんだけど、聞きながらじゃないとよう歌えない。今度歌を教えて。

〈二〇〇一・七・一二〉

センター長：歌の切れ目が分からない。このテープはずっと続いてるよね。わたしにはどこで終わってるのかが分からない。安さんは分かる？歌を一曲だけ録音したいんだけどちょっとみてて。

筆者：うん。一曲だけじゃなくて二曲を入れよ。これはB面だからA面の一番目と二番目。ベンノレとテピョンガ。

センター長：（テピョンガを聞きながら）そうそう。この歌を踊りたかったの。このときの「ニリリヤニリリヤニナノ～」。今年はYDさんやKKさんが浮いている。なんで今日安さんが来んのかとしきりに聞いてるのよ。KEさんは踊りがうまいよ。Cさんともまた違う。肩を動かすのが（肩を揺すってみせながら）こうやってこうやってね。

筆者：二曲の歌詞をつくっておこうか。

センター長：うん。そうして。明日は（花火大会）、安さんが先ず、こどもたちに踊りを教えて。YDさんらは、民族衣裳着て踊るんだと浮いているね。今年はセンターで温泉旅行に行かれないと言ったら、韓国へ行こうって。船を乗って朝ついたら、一日遊んで夜船のって来ればって。今は安さんがいるから安心よね。万が一何か体の具合でも悪くなって緊急の場合は病院でもいけるからね。わたしたちだけだったら不安だけど。ま、来年かな。韓国、一泊温泉、日帰りの三つのプランを作れば。この

ままじゃ面白くないよね。

〈二〇〇・七・一三、午後六時三〇分〉

（施設内の花火大会）

（わたしは通常一日の仕事を終えて、私用で花火までの合間に外出をした。その途中でYDさんと出会った。YDさんの手には、風呂敷があり、民族衣裳であることは聞かなくても分かった。）

YD：あんたどこに行くのかい。あんたがおらんとどうするんね。

筆者：ちょっとだけよ。帰ってくるからね。先に行っとってくださいね。

（わたしは子供二人と、子供の友だちを一人の三人をつれてセンターに戻った。なかには韓国の民族衣裳がづらりと並んでいて、わたしも自前の民族衣裳を着替えるため着替え室に入ってみると、YDさんや職員が韓国の民族衣裳を着替えていた。子供たちも韓国の民族衣裳に着替えさせて貰っていた。花火大会は七時に始まり、保育所からの盆踊り、センターからの「炭坑節」を、利用者の歌を聞きながら踊り、三番目に韓国民謡の二曲をテープで流しながら踊った。踊りにはYDさん、Cさん、KKさん、センターの職員らが中心として踊り、保育所の園児等がたくさん出ていた。KEさんとTKさんも来ていたので、誘ってみたが、KEさんは「体調が悪いから」といって断り、TKさんは「踊れない」からと断った。後にNMさんの孫と息子が出てきて、お婆さんもでてきてくれた。わたしはお婆さんに「アンニョンハセヨ」とあいさつをすると、息子さんが寄ってきたので、息子さんにも「アンニョンハセヨ」とあいさつをした。息子さんからも「アンニョンハセヨ」とあいさつが帰ってきた。息子は自分の子供の園児にも挨拶を言わせた。NMのお婆さんは「あなたは踊りがとってもうまいのね。私もならいたいね」と笑顔でいった。NMさんは六〇代の在日で、以前ある勉強会の二次会で何度か立ち寄ったことのある焼肉やのおばさんだ。民団で民謡を教えて貰いながら、歌詞を読むことで、韓国語を勉強していた。）

〈二〇〇二・八・二三〉

KE：わたしは若いときには、いろんなことをやりおった。映画館もしてたし、タバン（喫茶店）もしてた。そのときは金持ちの人はテレビを買っていたけど、まだテレビはみんなもっていなかったから。

みんながテレビを買いはじめてから映画館がためになったのよ。それからはタバンをしていたの。イエの下で。

ＹＤ：（店で）糠漬けを漬けて売りおった。カジ（なす）も蒸してからいろんなヤンニョム（さまざまな調味料を合わせたもの）でムチョソ（和えて）売りおった。そしたら、近所のおやじが美味しいといってよう買っていた。

筆者：どこで韓国料理の味付けを覚えたんですか。結婚前からも作っていたんですか。

ＹＤ：いや。自然に覚えるよ。結婚前は全然したことがない。シオメ（姑）と一緒に住んでいたからいろいろ覚えたんじゃろ。じゃけど、シオメは、終戦後すぐあっちへ帰ったよ。シヌイ（夫の女姉妹）三人連れて帰った。シアブジ（舅）が原爆で頭から煙が出たから、あっちへ行きたいと言って、行った。そしてその次の年に亡くなった。シヌイは四人おったけど、一番上のシヌイは結婚してたから、下の三人だけ連れていったの。一人はこの近くに住んでいる。

以上の聞き取りをするに当たって、聞き手が韓国人であり、韓国語が話せるということが、語り手に親密感を与えていることは言うまでもない。在日一世は、ほとんどが韓国語が話せる人たちであるが、日本の生活が長いため日本語の方が話しやすい面ももっている。しかし、在日同士の会話で日本語で話すのかどうか聞いていると、日本語のあいだに韓国語の単語がとび出る。おもに親類関係の呼称や食べ物の名前に韓国語が頻繁に出てくる。人によると（ＮＳさんのように）、日本語の話を聞いて、韓国語が分かる人には韓国語、日本人には日本語と使い分ける人もいる。他方、（Ｃさんのように）韓国語を聞くのは分かるが、いつもの習慣からなかなか韓国語が出てこないので、日本語で返事をする人もいる。

語り手に昔の体験談を聞くのはそれほど困難なことではなかった。とくに原爆の話になると、話が尽きない。そのことに「広島の在日」を強く感じる。しかし話題はいろんな面に及び、いつも数人が同席だったので、一人の話をゆっくり聞くことができず、話がこんがらがることもあった。

今のところ語り手は女性が多く、そのためか、より広く戦前の広島全体に及ぶような話題は少なかった（今はデイ・サービス・センターに来なくなった男性一人が、

むかし宇品で軍需工場の製品の運搬の仕事をしていたという)。

今回の資料は二〇〇二年八月までのもので、また仕事の合間に聞いた話を収めただけなので、話の中身は断片的でまだ不十分なものである。しかし、それでも資料紹介の価値はあろうと判断した次第である。聞き損ねた話、聞いたがここに紹介できなかった話も少なくないが、それらは次の機会になる。在日一世の体験談をどこまで正確に再現することができるだろうか。自分の力不足を悔いるばかりである。

(1)青木秀男「近代と都市部落——広島市A町を事例として」『部落解放研究』三号　一九九七年

(2)介護度とは、本人の要請を受けて、どの程度の介護が必要かを医師が診断し、ケア・マネージャが判断した上で、市町村が認定する介護の段階をいう。身体の状況に応じて、「要支援」「要介護」が軽い方から、一から五までの六段階に分けられる。

(3)日本人利用者の聞き取りから。「この施設には朝鮮人が多いなどという人がいたけど、そもそも朝鮮人がいるからこの施設ができたんだと言ってやった。」

(4)この地域は大手のハム製造会社の地場であり、また「でんがく」という牛や豚の内蔵で作る食べ物もある。

(5)『血と骨』梁石日　幻冬舎文庫　二〇〇一

(6)『広島新史　都市文化編』二部一章

(7)冬を越すために多量につけるキムチで一年中で一番おいしいといわれている。